

新漁業管理制度推進情報提供事業

(抄録)

佐藤 晋一・中田 凱久・黄金崎 栄一・高橋 進吾・今村 豊

漁 況

平成11年の漁況の特徴は全県的なマサバ、マイワシ、スルメイカの不調であった。

マサバは八戸で前年の半分以下、陸奥湾内の平舘でも約5トンと低調であった。日本海側でも1トンに満たず低調であった。

マイワシも八戸で過去10年平均の10分の1、平舘もここ3年間は100トン前後と低調であった。また、日本海側でも1トンに及ばず1985年以降では最低となった。

沿岸域におけるスルメイカー本釣漁は津軽海峡側は2年続きの低調となった。日本海側では低調だった前年の154%、津軽海峡側で83%、太平洋側では161%であったが、過去9年間平均値と比較すると89~29%と極端な不漁であった。海域別にみると日本海側では前年より1カ月遅い7月にピークをむかえ、1,666トンの水揚げがみられた。津軽海峡側では前年同様の8月にピークをむかえたものの、水揚量は458トンと前年と同程度にとどまった。太平洋側の白糠では前年より1カ月遅い8月にピークをむかえ、水揚量は331トンにとどまった。また、八戸では前年と同じ8月に1,323トンのピークをむかえた。

日本海のアブラツノザメは近年、減少傾向にあるが、1999年は、1985年以降最低を記録した前年の3.7倍となった。日本海北部から津軽海峡（下前～佐井）にかけてのヤリイカ漁は前年を大きく上回った（前年比1.8~2.8倍）。日本海南部のヤリイカ漁は前年をやや下回った。

日本海のウスメバルはここ2ヶ年漸減傾向にあるものの、引き続き高い水準にあった。

タイはここ3年間は漸減傾向にあるものの、引き続き高い水準であった。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイは前年の約8割（73トン）となったが、引き続き高い水準にあった。

主として定置網で漁獲される日本海のブリは前年より124トン多い444トンが水揚げされ、1999年は1985年以降では最高の漁獲となった。

太平洋のまき網で漁獲されるマサバは2万トンとなり、漁獲が上向いた昨年の4割弱となった。日本海のマサバは1トンで、3年続きの低水準、平舘でも2年続きの低水準となった。

資源減少が危惧されている太平洋のまき網によるマイワシ漁も9,766トンと、1985年以降最低だった前年及び前々年の約10倍となった。それでもなお、過去14年平均の6%に満たない状況が続いている。日本海の定置網で漁獲されるマイワシも0.6トンと過去最低の皆無状態である。

海 況

平成11年度の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた。対馬暖流（日本海）・津軽暖流（太平洋）の流勢指標を平年と比較することで表現すると次のとお

りである。なお、日本海及び太平洋の観測定線図を図1に、流勢指標の暖流幅、津軽暖流張り出し位置、水塊深度についてはその模式図を図2及び図3に示した。また、平年比較の基準については章末「参考」に示した。

1 日本海（観測月 2～4月、6～12月、各月1回）

平成11年の青森県日本海沖合における対馬暖流域の水温は6月、10月及び12月に高めで、その他の月はほぼ平年並みに経過した。対馬暖流の勢力は、定線観測結果によると2月から7月、10月及び12月に強めとなっていた。2月から12月の期間中は強め基調で推移し、特に12月ははなはだ強めとなっていた。

表面水温は4月及び7月はやや低めだったが、8月以降はやや高めからかなり高めで推移した。50m層水温は8月にやや低めだったものの3～7月及び10月以降は高めであった。100m層水温は3月及び9～12月に高めとなり、特に12月ははなはだ高めとなっていた。

100m 5℃等温線の岸からの位置で対馬暖流の流幅をみると、舳作崎線では2月から3月はかなり広め、7～9月やや広め、11月かなり広め、12月にははなはだ広めとなった。また、十三線では3～4月にやや広め、8月やや広め、9月やや狭め、11月やや狭めで12月はかなり広めとなった。

水塊深度を7℃等温線の最深度でみると、7月はやや深め、12月ははなはだ深めとなっていた。

対馬暖流の北上流量を水深300m層を無流面とした地衡流量でみると、2～6月ははなはだ多めだったが、7月にはかなり多め、8月にはやや多めとなった。11月にはかなり少なめとなったものの、12月には再びはなはだ多めとなった。

2 太平洋（観測月 3月、6月、9月、12月、各月1回）

平成11年の青森県太平洋沖合における津軽暖流の勢力は、3月にやや強く、6月以降は平年並みに経過した。

表面水温は3月にやや高めで、9月及び12月はかなり高めとなった。50m層水温は3月にかなり高めだったが、それ以降は平年並みに経過した。100m層水温も50m層水温と同様の経過を示した。

津軽暖流の深さを尻屋崎線における7℃等温線の最深度でみると、3月及び6月は平年並み、9月はやや浅め、12月はかなり深めとなった。

津軽暖流の張り出し位置を尻屋崎線における100m 5℃以上塩分33.7psu以上の東端位置でみると、3月はやや西偏（弱め）、9月はかなり西偏、12月ははなはだ西偏となり、全体的に張り出しは弱めとなっていた。

